戦うか？死ぬか？

REON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦うか？死ぬか？

【Nコード】
N2450O

【作者名】
REON

【あらすじ】
封建制度により秩序が守られていたオーランティグ大陸に、突如現れた醜悪にして凶悪な『魔物』の群れ。騎士団の精鋭すら敵わぬ『禍々しきモノ』と戦う事を命じられたのは『罪人』達だった。「五千匹の魔物を滅ぼせば、その罪を免じてやる」。その言葉は嘘か誠か。生を贖うため『罪人』たちは戦う。

001

荒涼とした赤茶け渇ききった砂地。ちぢれて枯れかけた雑草。所々に覗く地に埋もれた岩石の風化した頭部。

遠く霞んで見える山々。地平の向こうに広がる薄青い海面と水平線。

視界のうちの330度ほどがそんなものばかりで占められた、絵にかいたような荒野。

ある理由から、今となっては望んで踏み入れる者も無い、そして踏み入れる事も出来ない、文字通りの無人の地。

そんな荒涼とした地に、しかし、そこかしこで、あるいは鈍い撃剣の、あるいは炎系や雷系方術の爆音が激しく鳴り響いていた。

ある者は単独（ソロ）で、またある者は数人で隊列（パーティー）を組んで、打ち倒し打ち倒される戦いに、その身を晒している。

その一角で、その男も戦っていた。

やや開け、周辺数十メートル四方には男と『敵』のほか動くものは見当たらない。

「じゅ、・・・・うっ！！」

10。その数字を、裂帛の気合に変えて振り下ろした剣は、過たず眼前の『敵』の急所、その醜いまでに肥大した頭蓋を割り砕いた。

どす黒い体液と、おそらくは脳漿を噴き出しながら崩れ落ちる『敵』。

絶命したであろうその返り血を避けるように、数歩飛び下がってから、男は大きく息を継いだ。

「ふぅ。やっとくたばりやがったか」

荒い息を抑えつつも剣を勢い良く振り回し、それに付着（つい）した戦いの残滓を払い落とすと、さらに数歩『敵』の屍から離れる。視線は『敵』から離さないままで。

ぼすっ。

屍から鈍い音がした。
ぶすぶす・・・。
続いてそんな音が断続的にし始めるのを皮切りに、濁った色の煙が上がり始める。
燃えている、わけではなかった。ただ朽ちていくのだ。
男が斬りつけた『手』も『足』も、そして『頭』も。煙を上げながらぐずぐずと崩れていく。それは、水で固めた泥の城が渇いて崩れていく様に、良く似ていた。
男が無感想な視線で見下ろしている間に、見る見るうちに崩れ粉々になり、果ては堆積した砂であるかのように形を失っていく屍。
音と煙が止み、さらに暫くたった後、男は無造作に、足先でその堆積物を蹴散らし始める。
「あった。あった」
そして、その中から目的の物を見つけ出すと、腰をかがめて拾い上げ手のひらに載せた。
それは、うずらの卵ほどの大きさと形をした半透明の玉。滑らかな表面には疵一つ無いものの、しかし決して美しいともいえない。
一度だけ透かすように日にかざし、一つ頷いて、男は腰に下げた布袋にそれを無造作に放り込んだ。
「さってと。ノルマ達成、だな」
もう一つ下げていた布袋から取り出した薄汚い布でざっと拭った剣を剣帯に提げ、男は踵を返す。
３３０度は、視界に入るものはただの荒野のみ。そして残る３０度に見える、切り出した石材を高く高く積み重ねて作られた『防壁』。
男が今いる場所からはやや遠いが、荒野を横切る『防壁』の一点。ただ一ヶ所にのみ設置された『門』を目指して、男はゆっくりと歩き始めた。

その国の名はアバラス王国といった。
オーランティグ大陸北東部に広がるアガラス平原の東部一帯を治める国だ。
東に広がる大海は、海産資源はもちろんのこと、船舶を用いた商取引による利益をもたらし、領土の大半を占める肥沃な平原は、豊かな農場、広大な牧場として更なる利益をもたらした。
元々はさほど大きな国ではなかったアバラスだったが、何代目かの王が行った洋上交易の拡大と、さらに数代後の王による平原の開墾奨励政策によって、いまやオーランティグ北東部はおろかオーランティグ全土においても、かなりの強国だ。
いや、『強国だった』という方が、正しいのかも知れない。
アレが現れた今となっては。
アバラスの版図の北東部、まるでどこか別のところにあった島を誰かが運んできたかのように、僅かな接点のみで大陸と繋がる半島、リグロム。
潮風の影響か、はたまた大陸北端であるが故の気温によるものか到底肥沃とは言えず、開拓の手も入らない荒れ果てたその土地が、アバラス王国のみならず周辺国家、果ては大陸中の衆目を集める事になったのは、なんの因果だったのだろうか。
発端は些細な出来事だった。
家畜が、農作物が荒らされる。そんな被害届けが、リグロムに程近い一帯を治める領主の元に届くようになった。
最初はたいした数でもなく、しかもリグロムに近い地区ばかりだったため、領主は「これも新手の税逃れ」とばかり一笑に付し、それを無視した。
それが、わずか数ヶ月の間に激増した。
リグロムに近い地区だけでなくその周辺、領主の住まうやや内陸に近い地区でまで、似たような届けが出されるようになったのだ。
こうなれば、それは領主その人の統治能力への評価にかかわり、

実際的な面では領地からの税収にもかかわる。さすがに放置しておく事は出来なくなり、領主は兵を派遣する事を決定する。

野獣の類であれば確実に駆逐できるだけの数を揃えた兵団は、内陸からリグロム方面へとゆるやかに、被害状況を調査し、跋扈する野獣を駆逐していった。そして、その制圧範囲がリグロム半島近郊へと迫ったある日、ぷっつりと消息を絶ったのだ。

すぐさま調査のため、一隊が派遣された。

調査隊は定期報告を怠ることなく兵団の足跡を追い、そしてその調査がリグロム周辺に及んだある日、またしても消息を絶った。

例の無い異様な事態に、領主は一計を案じた。第三陣として、第一陣を超える兵力を持たせた新たな部隊を送り出しつつ、その部隊とは別にもう一隊、ある任務を与えて送り出したのだ。

その任務とは、第三陣の行く末を観察すること。第三陣に何事かあれば、それを見捨てても戻り、領主へと報告すること。

何事も無く第三陣が戻れば良し。万一、第一陣や第二陣と同様の事態となっても、監視隊が戻りさえすれば、何が起きているのかは把握出来る。

そして。第三陣は領主の下に還る事く、監視隊は驚くべき事実を持ち帰ったのだった。

「彼の地に、禍々しきモノが蔓延っております」

監視隊の指揮を任せた側近の言に、領主は眉を潜めた。

——『禍々しいモノ』とは一体?

詳しい報告を聞くうち、領主の顔色は見る見る悪くなり、そして最後には一切の血の気を失っていた。

『魔物』。監視隊長はソレをそんな言葉で表現した。

並みの兵士を凌駕する膂力と攻撃本能をもち、姿形は醜悪且つ歪（いびつ）で、まかり間違っても人（ひと）とは呼べないソレらは、リグロム半島から現れた、らしい。

リグロム周辺から野獣の被害が広がっていったように思えたのは、野獣たちですら『魔物』に怯え、それから離れようとした結果に過

ぎなかったのだ。

　リグロム近郊に至り、そこに戦闘の痕跡をみつけ、調査のために野営した第三陣の兵士達は、『魔物』達に包囲され奇襲（バックアタック）を受けた。

　個としての戦力に絶望的なまでの開きがあったわけではない。同数であれば、少なくとも一部は逃げる事も退く事も出来ただろう。しかし、それは人同士の場合、そして同数である場合の話だ。

　見た目からして生理的な嫌悪感を抱くほどの異種異様、どのような存在なのかどのような能力をもっているのかその攻撃手段は何なのか。何一つ分からない、そんなモノ相手に平常心を保てる者はいない。そして、平常心を欠く者に常（つね）の力を出すことなど出来るわけが無い。

　第三陣は、奮戦むなしく『魔物』達に蹂躙され全滅を喫し、その屍骸は『魔物』達によって運び去られた。

　――自らの手に余る事態。

　領主の決断は早かった。

　王都に早馬を送り、自らも監視隊長たる側近を引き連れ王都へと向かう。

　事態はアバラス国王の預かるところとなり、即時王国騎士団が派兵され、しかしそれをもってすら『魔物』の侵攻を押し止めるのがやっとだった。

　襲撃の度、一人また一人と命を落とし、じりじりと疲弊し数を減らしていく王国騎士団。にもかかわらず、『魔物』達は次から次へと湧き出すかのように現れるのだ。

「『魔物』が海を渡る事はないらしい」

　理由こそ分からないものの、それに気付いた国王とその幕僚は各地の領主達から徴兵し、一時的に戦線を半島内に押し込め、同時に国中から職人を集めて半島の入り口に『防壁』を築き、『魔物』を半島内に封じ込めた。

　しかし。『魔物』が海を渡らないという確証はない。また、いつ『防壁』が破られないとも限らない。そうなれば、王国そのものが

『魔物』の蹂躙を受けるのは眼に見えていた。

　遺恨を断ち切るためには『魔物』を滅ぼすほかない。しかし、魔物を殲滅出来るだけの大兵力は到底用意できない。

　他国に援助を求める。

　ついに国王が決断しようとした時、一人の側近が冷笑と共に提案した。

「死んでも困らぬ兵力を使いましょう」。

　国内で無法を働く盗賊の類、留置されている罪人、そんな無法者達を『防壁』の向こうに送り込んで『魔物』の相手をさせようと言うのだ。

　冷静に考えられたならば、そんな事はしないし出来なかっただろう。それに無法者と言っても所詮は人間だ。鍛え上げられた騎士団の精鋭ですら手を焼く『魔物』相手の、決定的な対抗策になどなるわけがない。良くて『時間稼ぎ』だろう。

　しかしその側近は、その冷酷な笑みをさらに強めて言う。

「『禁呪（タブー）』を使えばよろしい」

　『禁呪（タブー）』。それは数ある方術の中にあってあまりにも凶悪であるがゆえに、術士たちによって使用を封印された術。効果そのものが凶悪なわけではない。術の副作用とでも言うべき現象が凶悪なのだ。

　それは一言で言えば、身体能力を数倍にも強化する術。その効果時間は永続。それだけであれば何の問題も無かった。しかしこの術を行使された者は、高められた能力と引き換えに身体そのものを破壊されていく。

　人間は通常その身体のもてる能力の数割しか使っていない。いや使えない。

　無機物を例に取るならば、調理器具が良い例だろう。耐熱温度上限の熱量に晒され続けた調理器具と、普通の料理に使われた調理器具と、どちらが長持ちするだろうか？答えは後者だ。

　耐熱温度上限とは、その調理器具が耐える事が出来る温度というだけであって、異常をきたさない温度というわけではないのだ。

人間の身体にも同じ理屈が当てはまる。一瞬だけなら身体のもてる最大の力を使う事は出来るだろう。『火事場のクソ力』と呼ばれるものがそれだ。そんな力を使い続ければ、筋肉組織はじわじわと壊れていく。場合によっては、瞬間的に壊れてしまうだろう。だから、人間は無意識の内にその力を制限している。自分が壊れないために。

しかし、『禁呪（タブー）』は、その制限を強制的に取り払う暗示術なのだ。被術者は身体能力の全てを使うことが出来る代償として、その後確実に壊れる。

その術を使うという。

「死刑と同じです。首を刎ねるのと、何の違いが有りますか？」

もう一度言おう。冷静に考えられたならば、そんな事はしないし出来なかっただろう。しかし、御前会議は既に冷静さを失っていた。国が滅ぶ、その可能性の前には人道などどうでもよい、という空気が会議を支配していた。彼らはおかしくなっていた、いやおかしくされていたのだ。一人の男によって。

「その策を是とする」

道義を忘れた会議の中に、国王の言葉が静かに流れた。

「戻ったぞ」

腰から外した布袋を一振りし、男は『防壁』の『門』の前に立った。

『門』と呼ばれてはいるが、その大きさは小さい。男二人がかろうじてすれ違えるか否かという幅と高さしかない。そして、その内開きの扉の表には幾重にも鋼が打ちつけられている。『魔物』の進入を許さないための防御策だ。

男の背丈の倍ほどの位置、鉄格子のはめられた覗き窓から覗いた厳しい表情に向けて、男は布袋を数回振って見せた。

「少し待て」
声から少しして、重々しい音と共にゆっくりと『門』が開いた。
その大きさから想像出来る以上に『門』も『防壁』そのものも分厚い。これもまた、『魔物』への対策。
中に入った男を十数人もの兵士が囲むように包囲した。
決して広いとは言えない、何もない長方形の部屋だ。
正面から近づいた将校が無言のまま差し出した手に、男は無造作に布袋を乗せる。将校は脇に立った従卒にその袋をそのまま渡し、従卒が袋の口を開ける。
この間、男への包囲は敷かれたままだ。一重目、二重目の兵士は腰の剣に手をそえ、いつでも抜ける体制を崩さない。
「1、2・・・10。確かにあります」
従卒の言葉に、将校が一つ頷き片手を上げると、右手側にいた兵士達がそれ以外の兵士達の後ろに着く。『防壁』の内壁と兵士による『壁』に通路が出来た格好だ。その先に、これも鉄張りの扉が一つ。
「ご苦労だった。行け」
将校の短い言葉に、男はにやりと口の端を上げ通路を進む。扉の脇で立ち止まると、剣と剣帯を兵士が乱暴に剥ぎ取った。
男は扉を抜けた。

男は立ち止まる事もなく、足早に通路を進んでいく。
所々に光の方術で生み出された光球が浮いているとはいえ、隙間無く石で囲まれているという圧迫感は気持ち悪いことこの上ない。
暫く歩き、突き当たりの左手側にある小部屋に入った。
「おや、今日もお前が一番のりか」
掛けられた言葉を無視して、部屋の中央に描かれた魔法陣の中に立って目を閉じる。

「ほっほ。せっかちじゃな」
　黒いローブの老人は、気にした風も無く楽しげに笑いながら魔法陣の脇に陣取ると、おもむろに古代語（エィンシェント）を唱え始める。
　蘇生の方術と解呪の方術。
　禁呪（タブー）によって破壊されつつあった身体を可能な限り回復し、そして禁呪（タブー）を解除する。これを行える術者は、アバラス王国広しと言えどもこの老人とあとは数人だけだ。
　方術の実力が足りないというわけではない。
　蘇生の方術だけなら使えるものは居ない事もない。しかし解呪は、ただ呪を唱えればいいと言うものではない。解呪しようとする術の術式を知らなければならないのだ。つまり、禁呪（タブー）の術式を知らないものは、それを解呪する事は出来ない。
　禁呪（タブー）は禁呪（タブー）故に、術式を知るものがほとんど居ない。それを知っていて、なおかつ解呪出来るのが、この老人とあとは数人だけしかいない。それだけの話なのだ。
「終わったぞ」
　言葉とともに自分の身体に漲っていた『力』が霧散していくのを、男は感じた。禁呪（タブー）が解けたのだ。
　喪失感と共に、今日も生き残ったという奇妙な満足感が溢れてくる。
　男は無言のまま、入ったのとは反対側の扉を抜け、目下の自分の住処である『収監施設』へと足を進めた。

００２

男は、それを『餌』と呼んでいた。
丸パンが２つ。兎、山羊、羊、日によって異なる家畜の肉と野菜を煮込んだシチュー、もしくはそれらを炒めた物。付け合せの生野菜のサラダ。山羊の乳。
見た目も味もそう悪いとは言えない。『外』で食べるのならある程度の金を取れるメニューとして、十分通用するだろう。
が、ここではそんな事は全く意味を持たない。美味かろうが不味かろうが、ある程度の量さえあれば大した違いはないのだ。
飢えと渇きを満たし、明日の戦いを生き残る力を得るためだけに、一日二回食わされる食事。これが『餌』でなくて何だというのか。
「を。今日もお前が一番かよ？」
パンを二つに裂きシチューに浸そうとしていたところに、見計らったように掛けられたダミ声。
顔を上げると、そこには男と同じメニューの載ったプレートを抱えた野卑な顔があった。頬に奔る一条の傷が、ただでさえ良くない人相をより一層の悪人面に見せている。
ゴラム＝グラームスタッド。
”傷の男（スカー）”という二つ名と、某盗賊団の首領だった事を自称する荒くれ者の一人。
後ろに居並んでいるのは、ゴラムがここで従えている、と云えば聞こえが良いが、要は有象無象の取り巻きだ。にやにやとしたしまらない顔でゴラムに諂（へつら）っている餓鬼達。
「どうやらそのようだな」
言葉少なく応えを返して食事に戻る男。
厚かましくも同じテーブルの正面の席に腰を下ろし、ゴラムは愛想笑いを浮かべてみせた。
「”迅雷（ライトニング）”のクライヴさんは、今日も単独（ソロ）だったのかい？」

「その名で呼ぶな、と言わなかったか？」
「おぉ、そうだったな。こりゃ失礼」
嫌味ったらしい口調で詫びる”振り”をするゴラムを、男――クライヴ＝エッジバルトは冷たく睨みつけた。
「死にたいか？」
「おいおい、ちょっとした冗談だろうがよ？」
男が発した紛れも無い殺気に、取り巻き達が色めき立つ。
しかしゴラム本人が、気にするなと手を上げて見せるとそれはすぐにおさまった。その程度には統括出来ているのだろう。
いや、それ故の取り巻きか。
「で、何の用だ。隊列(パーティー)への誘いなら、答えは変わらんぞ？」
「んな事ぁわかってる」
蠅でも払うかのように手をひらひらさせる動作はどこか滑稽だが、その目は欠片も笑っていない。
クライヴが彼の隊列(パーティー)に入るのを拒絶した事を、根に持っているのだろう。しかし、男からしてみればお門違いの八つ当たりでしか無い。
単独(ソロ)でも隊列(パーティー)でも構わん。現に、あの男はそう言ったではないか。

「貴様等くず共に、生きるチャンスをやろう」
彼等をこの『収監施設』に放り込んだ時、青白い顔をした官吏達はそう言った。
「特別な術を施術して身体能力を引き上げてやるから『魔物』と戦え」
「一日十四の『魔物』を倒せば、戦いで傷ついた身体は癒してやろう」
「心配は要らん。『魔物』は滅ぶときに卵のような玉を残すから、それを持って帰ってくれればいい」
「国のために戦う。これほど誇らしい事は無いだろう」
囚人達は、口々にお題目を唱える官吏達を鼻でせせら笑った。

その場に集められていたのは、拘置されていた者の中でも札付きばかりだ。よくて終身刑、大抵が死刑執行を待つばかりのならず者達に、「国のために戦え」などとは良く言ったものだ。

「はっは。そんなご立派な戦いなら、お高くとまった騎士様方に、熨斗付けて譲ってやるぜ」

「おぅ。あいつらはそのために居るんだろうがよ」

「気高くも貴い聖なる戦ってやつだしなぁ」

「オレ達みたいな下賤の者には、まったく畏れ多いぜぇ」

口々に飛ぶ野次。

怒り顔を真っ赤にする官吏達。

そんな中から一人の官吏が囚人達の前にゆっくりと進み出た。蒼いローブがゆらりと揺れる。

「五千だ」

囁くような声は、しかし囚人達の間に冷たく染み透った。

他の官吏のように野次に動じた気配は微塵も無い。昏い光を湛えた眼が囚人達を見つめた。

「五千匹の『魔物』を滅ぼした者は、その罪を許してやる。使い切れないほどの金もやろう。どことなりと行くが良い」

温度の無い言葉。

「ごっ、五千っ！？」

誰かが鸚鵡返し（おうむがえし）に反駁（はんぱく）した。

「そんなもん、やっ・・・」

やってられるか。言いかけた男の眼を、蒼い官吏がじっと見つめた。

ごくり。誰かがつばをのむ音が薄暗い部屋に響く。

「一日二十倒せば二百五十日。三十倒せば百五十日と少し。単独（ソロ）でも集団（パーティー）でも構わん。一人頭で五千あれば良い」

視線は男を離れ、ならず者達の眼を順番に射抜いていく。

「一対一なら騎士など目ではないのだろう。身体強化があれば尚更だろう」

ぐらり。ふいに最初の男の頭が揺れた。一人、二人、蒼い男に魅入られたかのように次々と。
「そこまで言うならやってやらぁ」
威勢の良い声は誰の物だっただろうか。
「眼に物見せてやるぜ」
「おぅ。たかだか五千。俺たちにかかればあっというまだ」
「蒼いの。言葉ぁ違えんなよ」
無法者の眼に火が宿り、荒事で鍛えられた筋肉が、かがり火でぬらりと光る。
「嘘はつかんよ」
翻った蒼いローブの向こうで官吏の口角がいやらしく上がったのを目にしたのは、クライヴただ一人だけだった。

「おぃ。無視してんじゃねぇよ？　あぁん？」
中途半端に威圧的な恫喝で男は我に返った。
あの蒼い官吏の見せたいやらしい笑い。
二カ月が過ぎたというのに、いまだに思い出すだけで気持ちが悪い。
それは、背筋を冷たい水が流れていくような逆撫でされるような、とてつもなく不快で不愉快な感覚。
「すまんな。少々考え事をしていた」
考え事、か。便利な言葉だな。
その自嘲が顔に出た。
「てめぇ・・・っ！」
ゴラムの顔に主が上り怒りに歪む。
大物を気取る者は、得てして自分に向けられた（と思い込んだ）感情に過敏過剰に反応するものだが、この男もやはりその例に漏れない。椅子を蹴って立ち上がりざま、テーブル越しに男の襟首に掴みかかった。
ぱぁんっ！

その刹那、脇から伸びた細腕が、高らかな音を立ててその手を払いとばす。
「くっ・・・何しやがるっ！」
睨み付けた先にあったのは、薄い笑みを浮かべた涼やかな美貌。
「あら、邪魔な物を払いのけただけよ？」
瑞々しく潤った艶やかな唇から漏れた少し鼻にかかった声は、どこまでも柔らかく甘く耳に余韻を残す。
その美貌、声音、そして匂うような色香を放つ均整の取れた肢体。女神もかくやたるその容姿に女を侮り、魅入られ、また劣情を向けた者達は決して少なくない。
そして彼らは、悉く潰えた。他ならぬ女自身の手によって。
その外見とは裏腹に、女が極めたのは陰惨きわまる暗殺術（アサシネイト）。
「ふ、”堕天使（フォールン・エンジェル）”・・・」
取り巻き達が一斉に息を飲んだ。
苦々しげに睨みつけるゴラムと、その凝視を真っ向から受け止めてなお、薄い笑みを絶やさない女。
空気が固まったように感じた。動こうにも動けない、声を出そうにも出せない。そして、視線を二人から離すことが出来ない。
娑婆ではそれなりに無法を尽くした男たちだ。荒事にも慣れている。でなければ『収監施設（こんなところ）』に居はしない。
そんな彼らの背筋を、冷たい汗が流れ落ちていく。
「てめぇ・・・っ」
「あら、やる気？」
仕掛けるのは果たしてどちらが先か。
交錯する視線の間でぶつかり合う鋭角な『気』は、見る間にその密度を増していく。
「やめておけ」
静かに声が割って入った。
ひどく落ち着いた声音だった。”傷の男（スカー）”と”堕天使（フォールン・エンジェル）”、いずれも名の知れた2人の一触即発の事態が理解できていないとしか思え

ない。
　しかし。
　びくり。
　その声に、睨み合う２人が揃って肩を震わせた。
　取り巻きたちには分からない、そもそも分かるレベルにいないのだ。
　先ほど見せたお遊びの殺気とは桁の違う、真性の『殺気』。
　瞬きする間もないほんの一刹那、声の主――クライヴから発せられたそれを感じとれたのは、睨み合う２人のみ。
　だから。
「けっ、興醒めだ。お前ら、行くぞっ！」
　吐き捨てて踵を返すボス（ゴラム）の表情に、怯えの色を見出すことなど出来ようはずもなかった。
「ふふっ、だらしないヤツ」
　その背を見送り嘯（うそぶ）いたのは、やはり女の強かさだろうか。
　ゴラムの立ち去った席にゆったりと腰を落とすと、男を流し見る。
　その瞳にはもう、怯えの色は欠片もない。
「ねぇ、クライヴ。おかしいと思わない？」
　だから、これもゴラムの事では無いのだろう。
窺うように、誘うように。
「何がだ？」
　応える声にも何の含みも感情も無い。
「最近のベイビーたちよ」
「ベイビー？　・・・ああ、『魔物』どもか？」
「そうよ。あたしの可愛い可愛い『魔物（ベイビー）』ちゃんたち」
　艶めかしく唇を舐め上げ、芝居じみた熱い吐息を漏らす。
「ヤツらがどうかしたか？」
　芝居と分かっていて、なお扇情的なその仕草に、しかし男は何の反応も見せなかった。
　そして、ただ問う。

女も気にした風は無い。
これが男の『常態』であり、女の『常態』なのだ。
「最近の『魔物（ベイビー）』たち、妙に手強くなってると思わない？」
「確かに、な」
息を潜めるような女の言葉に、男の脳裏に今日の戦いの情景が浮かぶ。
腕を落とし腹を裂いても、頭蓋を打ち砕くまで暴れ続けた『魔物』。２ヵ月前、『収監施設（ここ）』に放り込まれた頃なら、あそこまでせずとも十分滅ぼせていた。
「あと、あの玉よ」
「ああ、あれか」
男も感じていた違和感。
『魔物』を滅ぼした証として持ち帰る玉。
最初はまさしく卵のように白いだけの石でしか無かった。
しかし、数を倒すにつれ日を追うにつれ、『魔物（やつら）』たちの残す玉（ソレ）は艶を帯び透明度を増していく。
「なんか、イヤな感じなのよ」
『餌』に手をつける事も無く吐息を漏らす。
数多の命をその手で散らせ”堕天使（フォールン・エンジェル）”とまで呼ばれた女の、それは漠然とした不安。そして。
「ライザ」
「なによ」
「らしくないぞ」
「・・・っ！」
息を呑み、唇を噛んで男を睨み付けるその瞳に、一瞬前に見せた陰は既に無い。
「『魔物（やつら）』たちが多少手強くなろうと俺たちはソレを滅ぼす。戦うか？　死ぬか？　俺たちにあるのはそれだけだろう？」
「・・・当たり前じゃない。そこらの雑魚とあたしを一緒にしないで」

「そうか」
「そうよっ」
打って変わって気勢を吐く女に、男はあるかなしかの苦笑いを浮かべる。
戦いから戻った猛者たちが各々飢えを満たそうと溢れはじめた『食堂』の片隅で、男と女（クライヴライザ）はゆっくりと『餌』を平らげていった。

００２（後書き）

ルビ多いですか？　そうですか。
堅苦しいですか？　そうですか。

003

男は苛立っていた。
抑えようにも抑えきれないどうしようもない苛立ちに、頭が焼き付いてしまいそうだった。
感覚がなくなるほどに噛み締めた奥歯がぎりぎりと音を立てる。
鉄でも鋼でもぐしゃぐしゃに噛み砕けば、多少は気が晴れるだろうか。
いや、そんなものくらいでこの苛立ちがおさまるはずはない。
原因ははっきりしている。
ヤツだ。クライヴ＝エッジバルトだ。あのすかした野郎のせいなのだ。

この『収監施設』に放り込まれた『罪人』たちは、来る日も来る日も反吐の出る『魔物』退治（ごみそうじ）を続けていた。
『表』で死刑を宣告された彼らが生きるためには『収監施設』（ここ）を出るしかない。
『収監施設』（ここ）を出るには『魔物』を倒し続けるしかない。
小役人どもに踊らされるのは癪だし業腹だが、また娑婆で好き勝手したければここを出るのが早道だ。
「戦うか？　死ぬか？」
つまりは二者択一の単純極まりない図式。
だから彼らは、時には単独（ソロ）で、時には手を組み隊列（パーティー）で日々を購っている。
ところが、だ。
どう言うわけかは知らないし分かりたくもないが、ここのところ『魔物』たちの個体戦闘力が上がってきている。最初の頃ならそれこそ赤子の手を捻るように、面白いように滅ぼせていた『魔物』たちに梃子摺り始めているのだ。それに加えて、当初は単体で徘徊し

ている事が多かった『魔物』が群れを作っている事も少なくない。
男自身は端《パーティー》（はな）から一隊列でしか戦っておらず、しかも隊長《リーダー》として指図する事が多く前衛に出ることが無いため、傷を負う事はほとんど無い。
しかし、前衛を任せている取り巻き共の消耗がかなり激しい。
今はまだどうにか致命傷を負う事も無く駆逐出来ているが、このペースで『魔物』《ヤツら》たちの力が上がり続けるとしたらかなりヤバい事になるのは目に見えている。
早めに手を打つ必要があった。
だから、ヤツに目をつけた。
『収監施設』《ここ》に放り込まれた当初から孤高を気取り、常に単独《ソロ》で戦っているクライヴに。
クライヴは強い。それは火を見るよりも明らかだった。
毎日陽が昇ると、彼らは荒地へと送り出される。
その順序に決まりはないが、同じ型の剣と革の胴鎧を与えられ身体強化の方術を施されて、一人残らず唯一つの門から放り出されるのだ。
『収監施設』《ここ》に戻るための条件はただ1つ。十匹以上の『魔物』を屠り、生きてその証を持ち帰る事のみ。
一絡げに『魔物』と呼ばれていてもその戦闘力はそれぞれだ。弱いモノもいれば強いモノもいる。たまたま弱いモノばかりと遭遇する事もないわけではない。
しかしそれが何日も続くなどという僥倖はありえない。そんな事は分かりきっていた。
だというのに、ヤツは常に誰よりも早く門へと帰る。
『収監施設』《ここ》に居る者は、いずれも名の知れた荒くれ者達だ。命の瀬戸際、修羅場、そんなものは日常茶飯事でしかないならず者達。
伊達や酔狂で死刑や終身刑を宣告されている訳ではない。
そんな猛者のひしめく中にあってなお、同じ武器で同じ防具でヤツは誰よりも早く『魔物』を屠りその証を持ち帰る。

どんな手品を使っているのかどんな詐術を使っているのかと、怪しんでその後を尾行（つけ）した者もいたが、その疑念は見事に打ち砕かれる事になった。
その者が見たのは、方術すら使わずただ当たり前に『魔物』と剣を交えるクライヴの姿だった。
但し、その剣の冴え、動きの鋭さはならず者の域を超え、並みの戦士のソレを遥かに凌駕していた。
縦と思えば横、横と思えば縦。人で無いが故の動きで猛然と振るわれるその爪を牙を、寧ろ易々とかわし、逸らし、受け流し、掻い潜り、その懐に潜り込み一気呵成に切り裂き屠る。
一匹を滅ぼすとすぐさま周囲を探り、次の獲物を見つけ、そしてまた屠る。
その姿は、正（まさ）しく”迅雷（ライトニング）”。

男はその力を欲した。
力ある前衛として盾として、自らの隊列（パーティー）に引き込もうとした。
しかし。
「断る」
ヤツはたった一言で拒絶した。
「俺は群れるつもりはない」
男は隊列（パーティー）で戦う優位性（アドバンテージ）を説こうとした。
生存確率について、戦闘効率について、そして単純明快な『数の暴力』について。
「そんな事は知っている」
それならば。
その言葉尻を捕らえ更に交渉を続けようとした男に、クライヴはもういいとばかりに首を振った。
あっさりとあっけなく。横に。
「お前らと組んでも俺に利がない」
そう言い捨て、男を残して立ち去った。

去り際の言葉を思い返すたび心の奥底に火が灯るのを感じていた。
言外に込められた嘲りが、男の率いる隊列（パーティー）を格下と見下す侮蔑が、黒い炎となってじりじりとその身を焼き焦がしていく。
・・・それもこれもコイツラが・・・っ！
男——ゴラムが目を向けた先で、前衛を任せていた取り巻きの一人が荒い息を吐いていた。
ついさっきまで接敵していた『魔物』をどうにか仕留めたらしく、その前で骸が煙を上げ灰と化していくのが見えた。
「やぁっとくたばりやがったぜ。へっ、梃子摺らせやがって」
刈り穂のような短髪をかき上げ粋がった気勢を吐いているが、少なからぬ手傷を負い血も流している。
致命的とは言えないが、このまま前衛を任せておくのはどう見ても危ないだろう。
「オレが、アガシのヤツと代わりますか？」
後詰めを兼ねた遊撃を任せていたジレンが、すぐ脇まで下がってきて控えめにぼそりと呟いた。
ザンバラ髪のこの男もアガシと呼ばれた男と同じく接敵していたはずだが、いつの間にか倒したものか『魔物』の影は既に無い。
ふざけてやがるのか・・・っ！
噴き出しそうになる罵声を、ゴラムは無理矢理に抑え込んだ。
ゴラムの隊列（パーティー）は五人編成だ。
前衛、つまり盾役として先のアガシともう一人、バドという無口な小男。次に後詰めと遊撃を兼ねるジレン。さらに指揮を執り兼後詰めとしてゴラム本人が控え、そして後衛にディナが就く。初歩的な回復の方術を扱うこの女は、ゴラムの情婦でもある。
『魔物』との戦いに規範（ルール）はない。直に剣を振るおうが方術で仕留めようが、落とし穴や罠などの奇策を用いようが、とにかく倒せばそれでいい。
但し、どのような戦い方をしようと日に十匹以上を滅ぼさなけれ

ばならない。
『魔物』を凌駕するために掛けられた身体強化の術は、「一日を越えて解呪されない場合、被術者の身体を侵す」と術者に聞かされている。
事実、逃亡を図ろうと門に帰らなかった与太者(クズ)が、翌日無惨な姿で発見された事がある。
青黒く変色した皮膚はいたるところで柘榴(ザクロ)のように弾け、襤褸布(ぼろぬの)のように裂け剥がれ、そこから赤黒く濁った血と砕けた骨片にまみれた、肉とも内臓とも分からぬ組織が簾(すだれ)のように溢れだした見るも醜悪な骸となって。
愚者(おろかもの)の末路と嘲笑うにはあまりにも凄惨なその様に、ならず者たちは戦慄と畏怖を禁じえなかった。
あんな風にならないためにも、一日に最低十匹の『魔物』を屠り『収監施設』に戻らなければならない。
五人居れば当然その五倍を。
しかし今日滅ぼした『魔物』の数はようやく三十三だった。まだ三分の二にしかならないというのに。
「どう思う？」
主語も何も無い短い問いかけに、ジレンは一時瞑目する。
彼の隊長(リーダー)が何を問いかけているのか、何を訊きたいのか、暫く吟味してから口を開いた。そこには何の感情も乗っていない。
「ヤツはヤツなりによくやっています。・・・が、―ヤツら（『魔物』たち）の伸びはそれを上回っている。あとは時間の問題です」
「そうか」
「ええ」
「なら、このままだ」
「分かりました」
無感情な声音は『諾』を返した。
必要を充分に満たし、決して出過ぎる事はない。ジレンは流れるような足取りで持ち場に戻った。

「アガシっ、バドっ、次の獲物を見つけて来いっ！　・・・ディナ、アガシを治してやれっ！」

隊列隊長（パーティー・リーダー）としてゴラムは指示を出した。

胸の奥底に熾火（おきび）のような苛立ちを、昏く冷たい炎を宿したままで。

００３（後書き）

少々短めですが「キリが良いところまで」という事でご容赦をm（＿＿）m

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

追記

・次話からルビ減らします。却って読みにくいような気がしてきました・・・。

004—1

「うおらぁっ！」
裂帛（れっぱく）と云うには少しばかり威圧感が足りないものの、唐竹に振るわれた剣は申し分のない威力を見せていた。
頭頂から股間まで縦一文字に切り裂かれた『魔物』が、左右泣き別れになって汚血（おけつ）に沈む。
しかし当のゴラムには、そんな光景にとらわれている暇も余裕も無かった。
びょうっ！
風を唸らせ左右双方から飛びかかってくる『魔物』。
横薙ぎに振るわれる二対の鉤爪を後退（バックステップ）でかわし、右手側、やや小柄な方に片手持ちにした剣を叩きつける。
宙に浮いている今ならば逃げる足場もない。醜い頭部を砕き脳漿（のうしょう）を弾けさせるはずの凶刃は、しかし鈍い衝撃によって阻（はば）まれた。
同じく右から迫っていた三体目が、剣と標的の間に飛び込んで来たのだ。
研ぎ澄まされた刃を持つ刀（かたな）と違い、剣で肉を裂き骨を砕くにはそれ相応の勢いと力が必要となる。振り切られる事無く力も乗りきらない剣は、鈍器と何ら変わらない。
「ぐぅ・・・ぉあっ！」
胴に僅かに食い込んだだけで十全の破壊力を発揮できなかったそれを、ゴラムは力任せに振り切った。
飛び込んできた一体は跳ね飛ばされ、最初に飛び掛ってきた一体と絡み合うようにもつれて地に落ちる。
奇しくも訪れた二体まとめて葬り去る絶好の好機。それは左から襲い来る殺気によってあっさりと無に帰す。
「ちぃっ！」
再び両手に持ち直した剣を、殺気の元に向けて振り回す。

ぎしぃっ！
鉤爪と鋼がぶつかり合い、拮抗する力と力が軋むような音を響かせた。
「力ならっ！」
鍔迫り合いの形で噛み合う剣に力を込める。
『魔物』はそれに応えた。鉤爪を振りぬくべく、ゴラムの剣を押し切ろうとその体重を掛けて来る。
その刹那、一転ゴラムは力を抜いた。
押されるがままに剣を引き、軸足を支点に独楽のように身体を旋回させる。受けた力に遠心力を加え、そのまま逆を取って横殴りに叩きつけた。
支えを失い宙を泳いだ『魔物』の頭部が爆ぜ、血の花が咲く。
一気呵成。未だもつれ、体勢を整えてきっていない二体に止めの刃を向けようとして、
「きゃぁっ！」
背後から上がった悲鳴に振り向くと、ディナに迫り鉤爪を大きく振り上げた歪な背中が見えた。不意をつかれたのか足場を乱したところを狙われたのか、彼女は腕から血を流し、それを迎え撃てる体勢にない。
――くそがっ！
膨れ上がる罵声を舌打ちに変え、大きく地を蹴る。
「逝っちまいなっ！」
宙に舞ったゴラムの、地を蹴った勢いと全体重を掛けて振り下ろした剣は、過たず標的の頭を破砕した。
「大丈夫かっ！」
背後に庇った女に声を掛けながら、体勢を整え鉤爪を構えた二体に剣を向ける。
その向こう、視界の端でジレン、アガシ、バドの三人もそれぞれに『魔物』との戦闘を繰り広げているのが見えた。
――ようやく五分か。

じりじりと迫る異形(いぎょう)を睨みつけながら、ゴラムは荒く息をついた。
振り向きざまに薙(な)いだ剣が、『魔物』の左腕を付け根から斬り飛ばし血風を散らした。
「ちっ。腕だけか・・・っ！」
荒く乱れる息を整えることも儘(まま)ならず、正眼に構えを取る動作さえジレンの常(つね)からみれば苛々する程に、遅々として重くもどかしい。
風を切って振り下ろされる鉤爪を、考える間も無く飛び込むように前転して避ける。しかし完全には避けきれず、数条の頭髪が引きちぎられ風に舞う。
転がった勢いのままに立ち上がろうとした眼前に迫る鈍色(にびいろ)の蹴り足。
ぎらりと陽光を映した釘のように細く鋭く尖った爪先を、咄嗟(とっさ)に剣を立てて受けとめる。
「ぐ・・・っ！」
両腕にかかった予想した以上の力に、呻きが漏れた。
奥歯を噛み締め、軸足を踏ん張り、
「くはっ！」
息を吐くと同時に眼一杯の力を込めて撥ね退けた。その反発を利用し、また転がるように跳び退って距離をとる。
荒い息の向こう、睨みつける先で隻腕の『魔物』が地を蹴った。
右、左、また右、そして左。突き上げ、振り下ろし、薙ぎ、払い。
片腕を失っているとは思えない猛攻に、息をつく間すら与えられない。
縦横無尽に振るわれる鉤爪を、その合間を縫って襲い来る足刀を、かわし、弾き、払い、受け流す。
ザリッ！
受け損ねた一撃が革鎧を削りイヤな音を立てるが、かろうじて抜けてはいない。

体が泳いだ隙をついて突きから転じて右に一薙ぎ。かわされたものの、返した剣を上段から袈裟懸けに振り下ろす。
読まれていたのか『魔物』は大きく仰け反ってそれをかわし、同時に振り上げられた腕が勢いよく振り下ろされようとして、しかしもう一段。
体勢が崩れているその懐に飛び込み、逆袈裟に斬り上げる。
『魔物』が大きく飛び下がった。
胴から胸部にかけて弾ける血飛沫(ちしぶき)が辛うじて刃の届いたことを知らせるが、向けられる殺気そのものは毛ほどの揺らぎも見せない。
――強い
睨み合うジレンと隻腕の『魔物』の間に、一陣の風が流れた。

その背後、隊列(パーティー)全体から見れば前方では、アガシとバドが二人一組で一体の『魔物』と対峙していた。
巨体、と云わざるを得ないその大きさは異様だった。
アガシもバドも大柄ではないが、決して小柄でもない。しかしその二人を優に頭一つ、ともすれば頭二つは上回る上背(うわぜい)は圧倒的な存在感を誇示している。
「うぉあぁぁぁぁっ！」
大振りに振り回された右腕を正に紙一重で掻い潜り、脇を抜けざまにアガシが力任せの一閃(いっせん)で胴を薙ぐ。
しかし力が乗り切らず、切れたのはどうにか皮一枚。
巨躯が背後に抜けたアガシを追う気配を見せ、それを隙と見たバドがすかさず逆胴(ぎゃくどう)に疾(はし)る。
けれど空を裂いて振り下ろされた左腕に遮られ、たまらず大きく飛び退がった。
意図せず『魔物』を中央に置いた挟み撃ちの体勢。
しかし、嵩(かさ)にかかって飛び込むような不用意な事は出来なかった。
リーチが違いすぎる。二人息を揃えて一斉に斬りかかってみても、おそらくは振り回される両腕に阻まれて、到底その急所に剣を届か

せる事は出来ないだろう。
　どちらかが先に動いて意識を引き付け、その時に生じるであろう隙をもう一人が衝く。この巨体を倒すにはそれしか無い。
「・・・畜っ生。しぶとい・・・っく・・・ヤツだ、ぜっ」
　荒い息の中でアガシが毒づいた。
　緒戦で無謀な突っ込みを試みた代償。大きく裂けた肩の傷から溢れ出る血が、中段に構えた二の腕を伝わって大地を赤く濡らしていく。
　バドも無傷ではなかった。
　連携を意図した幾度かの要撃や、不用意なアガシを庇う為の挑発を兼ねた積極的な攻めの際、深くは無いが腕や肩口にいくつかの手傷を負っている。
　対する『魔物』に目立った傷は無い。
　剣が届いていない訳では無いが、離脱を前提とした攻めではその肉を断つのに充分な力が乗らず、結果として皮一枚を切り裂くに留まっている。
　このまま持久戦を続けていれば、アガシと二人で共倒れになるのは目に見えていた。
　――ジリ貧。
　そんな言葉がバドの頭をよぎった。

　最後の獲物にと、一際目立つ大物に目をつけたのはアガシだった。ひらけた草地をただ一体で闊歩する『魔物』は、その巨躯からしてかなり手強そうな風情ではあったものの、ディナの最後の呪力で傷を癒したばかりの隊列（パーティー）全員でかかるならば、さして梃子摺る事も無いだろうと思えた。
　常の如くアガシとバドが先陣を切って剣を振るい、標的をその場に釘付けにしたところまでは予定通り。
　その背に必殺の刃を叩き込むべくジレンが動こうとしたところで、

彼らの目算は砕け散った。

ヒュルルゥゥゥォォォォォッツッ！！

『魔物』が鳴いた。甲高く高らかに。

何の手妻かと一瞬足を止めたジレンの前に飛び込んできた影は、『魔物』の形をしていた。

何処から現れたのか、などと考えている暇(いとま)は無い。

ジレンはその足を止め、ならばと地を蹴ろうとしたゴラムの前にもどこから沸き出したものか別の『魔物』が鉤爪を研ぐ。

1対5の戦いは一瞬にして3対5となり、次の瞬間には7対5となっていた。

――嵌(は)めるつもりが、嵌(は)められたとはな。

ゴラムは一人ごちる。

あの遠吠えは、仲間もしくは配下を呼ぶためのものだったのだろう。

幸いと言って良いものかどうか、最初の大物とジレンの足を止めた一体を除いた五体は比較的弱い個体のようだった。

とはいえ『魔物』は『魔物』だ。

呪力が尽きたとはいえディナも剣を持たされてはいるが、『外』ではそれなりに鳴らした女傑ではあるが、やはり分が悪かった。

最初の頃であればまだ互角以上に戦えていたものの、ここ最近の力を増した『魔物』相手では、弱い個体でもなければ1対1ですら苦戦するのが必至。まして複数体を相手取るなど、不可能に等しい。

隊長(リーダー)にして情人たるゴラムがそれを庇い、そして『魔物』たちもそれを捨て置くほど甘くは無かった。

アガシとバド、そしてジレンがそれぞれ抑えている二体を除いた五体が、こぞって二人に襲い掛かってきたのは当然の帰結。

思考する間にも、『魔物』が攻撃の手を休めるような事はない。

地を這うように迫り来て、すくい上げるような一撃をくれようとした一体を蹴り飛ばし、機を合わせて飛び掛ってきたもう一体は横薙ぎに迎え撃つ。

鉤爪でそれをいなし、跳ねるように距離をとる『魔物』。

「ディナ、右のヤツは任せるぞ」

「わかったわ」

諾（だく）を聞くより早くゴラムは左手に疾（はし）る。背に剣戟（けんげき）を聞きながら、大きく大上段に振りかぶった。

刹那『魔物』が姿勢を低くし懐に飛び込んでくる。

上段に対し低い姿勢から懐を狙うのは定石中の定石。

だから。

「喰らえっ！」

手の中でくるりと逆手に持ち替えた剣を、真っ直ぐに振り下ろす。

肉を裂き骨を砕く鈍く確かな手応え。

断末魔の足掻きをみせる『魔物』に止めの一撃を見舞ったゴラムが振り返ると、ディナも荒い息でこちらを振り返るところだった。

返り血にまみれたその手に、剣を握り締めて。

「やったか」

ゴラムがそう声を掛けようとしたとき。

「アガシぃっ！」

バドの悲鳴が耳を打った。

００４－１（後書き）

「００４－２」に続きます。

戦闘シーンは妙に力が入ってしまってこの始末。個別戦闘にしたのは失敗でしたｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2450o/

戦うか？死ぬか？

2010年11月16日02時25分発行